

2019. 6. 5 (水)

## 学ぶということー「疑い深いトマス」を考える

Hans Peter Liederbach

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

(ヨハネによる福音書 20 : 24-29)



この絵画は、イタリア画家カラヴァッジョの作品です。1600年代初頭の作品です。カラヴァッジョが描いたのは、先程、打樋先生がお読みくださった、疑い深いトマスがイエスの復活を自分の手で確かめようとする場

面です。

この絵画にふさわしいサブタイトルは、懐疑心と暴力がかもしれません。イエスの復活を信じないトマスの指がイエスの脇にある傷口を開き、中に深く指し込まれています。トマスの表情をご覧ください。非常に真剣です。

トマスの話しとこの絵画は、私に二つのことを思い出させてくれました。一つは、「全ての人は自然に知識を切望する」というアリストテレスの言葉です。こうした知識への切望を最もよく示しているのが小さい子供です。子供は常に大人に尋ねます：なんで雪は白いの？、なんで花が咲くの？、無数の“なんで”。学校教育の使命は、元来、この知識

への切望を導いたり、維持したり、促進したりすることにあってはならないでしょうか。

### 科学的知識

私にこの絵画が思い出させてくれるもう一つのことは、近代科学的な方法論、とりわけ近代科学における実験という方法をいち早く標榜したフランシス・ベーコンの言葉です。彼は言う「科学は自然を拷問にかけて白状させる。」この言葉が表しているのは、近代科学の、自然に対する暴力的な性格だと言えましょう。実験室で毎日行われている動物実験を考えれば、このことは明らかでしょう。懐疑心を持っているトマスも、知識欲が孕んでいるこの暴力性を具現しているのではないか、と思われまふ。さらに、トマスの話が私に教えてくれたもう一つの重要なことがあります。それは、一種の知識には限界がある、ということです。具体的に言えば、実証的知識には限界があるということです。実証的知識とは何かと言えば、例えば水の化学的構成、赤道の長さ、このチャペルの面積、私の身長。こうしたことについては、確実な知識を得ることができます。このチャペルの面積を知りたいければ、床をメジャーで測り、答えを得ます。赤道の長さ、私の身長も同様。つまり、我々が適切な方法を用いれば、最終的な答えを手に入れて、知識欲を満たすことができます。しかも、このような問題への答えには、正解、不正解というはっきりした区別があります。

### 意味体験

しかし、トマスの話、カラヴァッジオのこ

の絵画、シェークスピアの歌、モーツァルトのピアノソナタ、夏目漱石の小説などは違います。絵画を見るとき、小説を読むとき、音楽を聴くとき、我々は一種の体験をします。絵画、歌、音楽、小説などは、我々にとって意味のあるものであり、価値のあるものである、ということを経験します。このような意味体験は、測りうるものでもなければ、方法的に説明できるものでもないのです。このチャペルの面積、私の身長は、一回測れば二度と測らなくてもいいです。これに対し、面白い小説は、何度読んでも新しい発見があります。カラヴァッジオのこの絵画は何度見ても、感動させられます。実証的に知ることができるものとは異なり、意味のあるもの、価値のあるものは、知り尽くせないものです。というのも、意味体験には、正解、不正解というはっきりした区別を許さないからです。

### 否定としての体験

結局のところ、意味体験は我々を驚かせる、否定の体験です。これはどういう意味でしょうか？意味体験は、ときに我々の当たり前を否定し、我々の期待、常識を裏切りまふ。トマスの当たり前は、人間が死ぬば二度と帰らない、という常識でした。イエスの復活が否定していたのはこの常識です。だからこそトマスは戸惑いを覚え、確認を求めていました。

意味体験は否定の体験であるから、我々はこのような体験に答えなければなりません。言い換えれば、意味体験を通じて我々を驚かせるものが我々の理解を求めているのです。このように我々に理解を求めるものは、芸術作品だけではありません。自分が生きる社会

の心の習慣、異文化、宗教、思想、人の人格なども実証的に知ることは難しく、理解されなければならぬものです。

さきほど、意味体験においては、正解、不正解の区別がない、と申しましたが、それは、理解することには、尺度がない、という意味ではありません。決して何でもあり、という意味ではありません。では、理解のためにはどのような尺度があるのでしょうか。もう一度トマスの話に戻しましょう。

## 判断力

トマスの知識への切望には何かが欠けている、ということが明らです。なぜなら、彼が要求している知識は、宗教という領域において得られるものではないからです。だから、「見ないのに信じる者は幸いです」と最後にイエスが言います。トマスに何が欠けているかと言えば、それはいわゆる判断力です。トマスが分かっているのは、実証的知識の限界そのものです。つまり、イエスの復活という意味深い出来事が要求する答えは、指で傷口を開き、中を指し込むことではない、とい

うことです。イエスの復活の理解にはもっと繊細な対応、判断力を尽くした解釈が必要です。

理解に尺度を提供してくれるのがまさにこの判断力なのです。判断力は人生において極めて重要です。哲学者カントは言います。「判断力の不足は、元来、愚かさといわれるものであり、そのような欠陥はまったく除去することが出来ない。」

大学での学びの目的は、実証的知識を覚え、この知識を獲得できる方法を身につける、ということだけではありません。これより大事な目的は、判断力を磨くということであると私は思います。否定の経験を回避せず、いわゆる難解な書物に取り組み、その内容を理解しようとすればするほど、判断力に重厚さが増します。

社会学はいわゆる人文学に属するものであり、その研究対象は意味のあるもの、価値のあるものです。それゆえ、社会学を学ぶ際、必ず理解と解釈を要求する問題に直面することになるでしょう。その際、最も必要なのが判断力なのです。

(社会学部教授)